
みっくす

空野妃紫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みつくす

【Nコード】

N1855E

【作者名】

空野妃紫

【あらすじ】

草、真子、茶々は仲よし3人組み。でも、遊び心で…草が茶々で、真子が草で、茶々が真子？どうなっちゃったの？

カチ、カチ、カチ。

「イったいわぁ、大丈夫なん〜」

カッターで切った茶々（ちゃちゃ）の指先から血が流れる。

「次、私〜。大丈夫、大丈夫。ちよっとした暇つぶしじゃん」

真子^{まこ}は茶々からカッターを取り上げると、指先に強く押し付ける。血が流れて落ちる。

「やつても白けるだけ……」

真子からカッターを受け取ると、草^{そう}はそう言いながらも二人に付き合っ、指先を傷つける。血が流れて落ちる。

「で…次は？何すればいいん？」

正三角形の頂点に各自の血が落ちている。図書館で見つけた怪しい本を見ながら、真子が指示をだす。

「えっと、三角形の中心に全員の血を落として終わり……でも、本当に人格いれかわったらどうする？」

「オレやつたら断然、真子の体がエエわ。女風呂とか、エッロイ下着つけて、鏡の前で見たりすんねん」

「ちよっとやめてよ。変態！草は、何したい？」

「茶々の体。できる限りの犯罪をつくす」

「おい、おい。草ちゃん、それは酷いわぁ〜オレの人生メチャクチャになるやん」

「関係ない。真子は？」

「よかない！」

「私〜、そうだなあ。茶々の体なら、『僕、変態です』って言いふらす。草の体なら、悩殺スマイルで、女子ノックアウト記録に挑戦」

「やだ……」

「オレに対して二人とも酷うないか？」

けっしてそうならない。と確信しているからこそ、こういう類の

バカ会話は楽しい。現実にならない仮定を話し合って、楽しむのは若者の特権だ。

3人はそんな会話をしながら、三角形の内心に血を数的しぼりだした。ポタポタ。と血は滴り落ちて混ざり合う。1秒、2秒、3秒、4秒、5秒……

「何もおきひんやん」

「だから言った。白けるだけ……」

草はいつものように無愛想な顔のまま答える。

「やっぱり、こんなものか」

真子は期待していた訳ではないが、それでも何となく残念そうに言う。夕暮れの教室。今いるのは3人だけだ。

「帰ろ。何か眠うなって……」

そこまで言って茶々が無言になる。不思議に思っ、真子が茶々を見ると眠っていた。呆れながら草を見たが、草も眠っている。

「二人とも寝付きハヤっ」

突っ込んだ真子も何だか、眠たくなってそのまま意識を失ってしまふ。校舎に響く、運動部の声も、吹奏楽部の楽器の音も聞こえない。

「おい、真子。起きい！」

「真子、起きて……」

真子は、くらくら。する頭を押さえながら起き上がる。なんだか髪質がおかしい。癖毛で、パーマのようにうねっていないといけないのに、その髪がない。短くて硬い。

「え？……どうして……」

起きた真子が見たのは、無表情な自分自身の顔と、困惑気味で涙目になっている草の顔だ。真子は、困惑で震える指先を二人にむけた。

「ま、まさか……よね……？」

「そのまさかやあ」

「俺、草……」

がつくりしたように、茶々らしい草が言う。そして、真子が草だと名乗った。嘘。

どう言うことだか、人格が入れかわってしまったのだ。たぶん、真子が茶々の体に、茶々が草の体、草が真子の体だろう。嘘っぱちが書かれたデタラメな本のはずだったのに。

「本っ、本は！」

真子がそう言って、慌てて本を探す。机に置いてあるはずの本がない。焦って、冷や汗が流れる。しかし、草は無言で本をだした。そして、開いているページを指差す。

「…ええつと…なにになに、もどるには互いの秘密を知ること……？」

真子が変な顔をしている。真子、茶々、草はメチャクチャ仲のいい親友同士だ。親より互いのことを知っているはずだ。そりゃ、少しくらい秘密はあるだろうけど？

「はあ？秘密って何やねん。そんなん、あらへんつちゅうに」

茶々の言葉に、草は頷いている。それは、真子も同じだ。まさか、こんなデタラメな本で、こんなことになるなんて。

「はあ、ダメ。疲れたあ」

考えるのが邪魔くさくなって、真子は頭を押さえながら呟く。茶々は立ち上がると、二人に言った。いつの間にか、鞆を肩にかけている。

「一晩、寝たらどうにかなってるかもしれへんで。帰ろ、帰ろ」

そう言ってでて行くとする茶々を、二人は追いかけた。草は茶々の肩をつかんでひきとめると、一言。

「どこに？」

草の言葉に、茶々と真子は草を見た。

真子は来たこともない茶々の部屋に来ていた。茶々から、部屋の鍵はわたされている。それで、鍵を開けるとそのまま部屋にはいる。何となく「お邪魔します」と言ってしまったのは、見ず知らずの部

屋だからだろうか。

茶々の部屋は以外にもあつさりとしていた。ベッドと冷蔵庫、机があるだけだ。1LDKの部屋。真子は茶々が独り暮らしをしていることさえ知らなかった。そう言えば、家族の話を聞いたことがない。

「秘密かあ」

何でもわかっていような気でいたけど、実は知らないことばかりだったのかもしれない。真子が茶々と友達になったのは、高校に入学して1週間がすぎた頃だ。あの頃の茶々は浮いている存在だった。

茶髪（今も茶髪だけど）に唯一の関西弁は、自然と浮いてしまう。自由な校風といっても、茶々の髪は蛍光イエローのようだったのだし、友達もいなければ、話しかける人もいなかったように記憶している。

英語の授業の時、クラスの中でペアになれと指示がでた。真子はその時、一人になってしまったのだ。話しをする人はいても仲のいい友達は、まだ、できていなかった。

そんな中、同じく一人でいる茶々を見つけて、声をかけた。その時以来、友達になったのだ。話してみると気さくで、おもしろい奴だった。

もどに戻るために、秘密を暴き出すというのはどうしても気が進まない。だって、そこに本人の意思がないじゃないか。暴くなんて卑怯。

「さてと、気持ちをいれかえて、お風呂」お風呂」

真子はいつものように帰ってきて直ぐ、入浴をしようと風呂場へとむかった。ユニットバスその浴室には、脱水所なんてない。シャワーカーテンすらなかった。それでも、おかまいなしに上着を脱いでいく。そして、鏡に映った体をみて手を止める。

「そうだ。茶々の体だった」

残念そうに呟く。上半身だけならまだいい。これは、熱い季節に

なるとよく見る。パンツ一丁も何とか許容範囲だ。しかし、下着の下は…

お風呂は諦めるしかなかった。残念。と思いながらも、茶々は浴室をでた。そこで、お腹がなった。腹が減っては、死ぬこともできない。何て、バカらしいことを思いながら、冷蔵庫を開けた。

「見事に何もなしなあ」

冷蔵庫には、ミネラルウォーターとビールが数本。

「未成年なのに、悪いんだあ」茶々の秘密その一かな」

未成年の癖に隠れて、こっそりビールなんて立派な犯罪だ。そんなことを思いながら、真子は食料がないか調べる。しかし、できたのは冷凍食品とカップラーメン。しかたなく、それを食べることにした。携帯の着信がなる。

「部屋、あさるな」

茶々からのメールだった。真子は茶々に返信を打ちながら、カップラーメンをすすする。

「『秘密その一』つと…」

それを打ち込んだ後、余白を思う存分開けて、そこに『未成年の飲酒。ビール発見!!』と打ち込んだ。そのまま、送信する。

その頃。草は、真子の家に来ていた。体が真子だからしかたない。玄関から直ぐに真子の部屋に行こうとしたが、真子の母親と出くわしてしまった。

「あら、真子。今日は遅かったじゃない。夕飯できてるから食べなさい」

真子の家には一度、茶々と二人で遊びに来たことがある。たしか、その時、話題だった映画を見に来たのだ。しかし、真子の家族とは初対面だ。

「……………」

無表情のままどう答えていいのかわからず、草は困ってしまう。色々あってお腹は減っていない。

「……………いい」

草は考えた結果、それだけを言うのと背をむけて階段をあがっていく。たしか、真子の部屋は階段をあがって右だった。

「真子、何かあったの？真子のご飯食べないなんて」

心配そうな真子の母親の声に、悪いことをした。と思いながらも、草にはこれ以上どうすることもできなかった。どう対応していいのかわからない。自分は他人とのコミュニケーションが物凄く苦手なのだ。

「真子、あなた大丈夫なの？体の具合でも悪いんじゃない？」

心配そうな声が追いかけてきて、草は振りかえると慣れない声で「大丈夫」とだけ言って、部屋にはいった。よくよく、考えなくても、この反応では真子の母親が心配して当たり前だ。

真子はよくしゃべるし、よく表情が変わる。明るい娘が突然、無表情で口数少なくなれば、どんな鈍感な母親でも気づくと言うものだ。自分ではあまりにも暗い。

「……………」

真子の部屋にはいり、その女の子独特の部屋に戸惑う。匂いからして違うのだ。真子らしい柑橘系の香りが部屋中に出ている。

花の形をした小さな小皿には、白いコットンが置かれている。草はそれに鼻を近づける。この部屋にある香りの元は、どうやら、それによるものらしい。はじめて来た時は、ドアが全開だったから、気づかなかった。

「……………」

真子の部屋を再び、見たし、ベッドの上にある脱ぎ捨てられたパジャマを見る。そして、気づいたのだ。服を着替えられないことに。そもそも、トイレはどうすればいいのか。

トイレがしたくなる前に寝ることにした。ベッドに横になって、目をつぶる。制服が、くしゃくしゃ。になるかもしれないが、着がえられないのでしかたない。

ベッドからは、時々、真子の香りがした。シャンプーの匂いだろ

うか。何だかわからないが、とりあえず、真子の匂いだ。それがベッドからするのだ。

「……………」

草は無言で立ちあがると、ベッドから遠ざかる。そして、壁にもたれて座った。真子の匂いが落ち着かない。とても眠れるような気分ではなかった。一晚、起きていればもとに戻れないのだろうか。

「その君、私と昼食しない？」

始めて真子と会った時、真子がそう言って声をかけて来たのだ。

正直、驚いた。無口で無表情な草に、用件以外話しかけてくる人間はいなかったからだ。

「今なら、得点満載。君の海老カツパンとこの味噌カツサンドを交換してあげるよ」

草にそう言っただけで笑いかけたのだ。草はそのあつかましいほどの勢いに、思わず頷いてしまった。手を引かれて連れて行かれたのは、屋上だった。そこには、先客がいた。

それは同じクラスの茶々だった。そう、真子も同じクラスだったのだ。正直に言ったら茶々は、物凄く苦手なタイプだった。茶髪だし、にぎやかだし、意味のわからないことで騒いでいる。あまりにもタイプが違う。

いま思えば、真子は学園で人気NO.1の海老カツパンが食べたかっただけだったのだろう。草はいつも海老カツパンをゲットしていたから。

携帯の着信がなって、制服のポケットに手をつ突っ込む。携帯をとりだして、メールを見ると、茶々からだった。

『任務をいいわす。真子の秘密をあされ』

そんなことが打ってあった。草は短く返事をかえした。「やだ」と二文字だけの返信。すると、数分後。電話がかかってきた。画面には、茶々の表示。

草のメールを見て、茶々はすぐに電話をかけた。自分の秘密を真

子に握られてしまったのだ。真子の秘密を握る必要がある。真子に無茶苦茶な要求をされないためだ。あのアマ、どんな秘密にぎったんやろ。

「草、頼むわ。オレ、真子に脅されてしまつて。お願い。草様、慈悲の心だしてえ」

『無理』

真子の部屋にいる草に茶々は頼みこむ。草は短く一言でかえしてきた。これはいつものことなので、茶々は気にもとめず。

「無理ゆわんと、そこを何とかしてえ。そやないと、草の部屋からごつつい秘密探したしたる」

半ば脅迫まがいな茶々の言葉に、草は一言『最低』と返してきた。茶々は「頼む」と言いながら、草をその気にさせようと四苦八苦だ。真子が草を連れてきたのは、春のことだった。屋上で過ごすには、抜群の季節だった。クラスに根暗な奴があるなあ。と思っていた。まさに、その根暗な奴が、目の前でメシと一緒に食べているのだ。

「お前なあ。もつとしゃべり、メシ不味^{マヌ}なるわ」

何も言わず、無表情のまま食べつづけている草に耐え切れず、つい突っかかるように言ってしまった。無表情で何も言わない石造のような奴なのに、妙に存在感があるから、圧迫感がある。

しかし、草は無表情のまま茶々を見つめてくるだけだ。茶々はその無言の瞳に耐え切れず、頭を掻き毟ると草の胸倉をつかんだのだ。「だから、せめてニコつとか、一言なんとか言うつとか。色々、反応はあるやろ。お前が、生きた石造みたいやから、息つまるちゅーねん！」

それでも、草の表情はかわらず、無表情で見ているだけだった。パチコン。茶々の頭に鋭い突っ込みがはいる。脳みそを揺らすような、後頭部の刺激。これは紛れもなく真子だ。

「痛いちゅーとるやろ！！お前の突っ込みは、破壊力だけで愛情があらへんねん」

「うるさい。草君、困ってるじゃない。あんたみたいにストップパー

のない無駄無駄トーク男と違って、草君は物静かな子なの。無駄だらけのあんたとは違うんだから」

「なに言ってるかわからんわ！もつとわかりやすう言え」

「だから、アンタは無駄なエネルギーが多いのよ。草君は、省エネタイプよ」

「海老カツパンもらったくらいで、オレよりコイツをかばうんか」

「はん、それじゃあ。海老カツパン持つてきなさいよ。ゲットできたら、メイド服きて『お帰りなさい。ご主人様』とでも、ビキニ姿で体育でも、数学でも、何でもしてやるわよ」

「おお、よう言った。明日、泣き見ても知らんで！」

二人は、草を置いて、いつものように言いたいことを言い合っていた。その時、始めて草が一言いったのだ。

「おもしろい」

その言葉に驚いて、草を見ると「おもしろい」と思っているとは、とうてい思えないような表情だった。無表情なのだ。

「何がおもしろいねん。おもしろいんやったら、笑え。笑え！」

草の頬を引っ張りながら茶々が言う。そんな茶々の鳩尾みぞおちに見事な拳を打ち込んだのは、草だった。そのまま、茶々は倒れこむ。

「ツツコミ……」

草がそう呟いた。茶々は鳩尾を押さえながら、息が耐えそうな声で言う。

「それ、ちゃう……」

それ以来、草をいれて3人でつるむようになった。何も言わないと思っていた草は、以外にも自己主張が強かった。的確に、一言だけで自分の意思を伝える。

「頼んだで。オレの一生がかかってるんや」

『卑怯だよ。茶々』

「ええねん。何と言われようと、頼んだで」

『考えとく』

草はそれだけ言って、電話を強制的に切る。茶々は携帯を握りし

めながら「頼むでえ」と言った。

「草、お風呂あいたわよ。さつさと、はいりなさい」

そう言っているのは、草の姉だ。さつさと離れていく足音。純日本屋敷の草の家は、剣道の道場だった。思えば、草に姉がいたことも、剣道道場の長男だということも知らなかった。だから、あんなにムツツリなのだ。

茶々はタンスから寝巻きを探す。スエットがあればいいが、あったのは浴衣だけだった。

「あいつ、こんなん着て寝とるのか」。ホンマお爺ちゃんみたいなやつぢやなあ」

茶々はそう言つて、浴衣と帯を持って風呂場へむかう。部屋をでる時に梁で額をぶつけた。草の体は、自分の体よりも遙にでかい。170センチ前後の茶々には、190センチ近くもある草の体は、何かと勝手が違うのだ。

「痛てて。また、ぶつけてしもうた」

額を擦りながら、茶々は風呂場へ行く。しかし、居間を横切らなければならぬ。そこで、草の父にあった。今、帰ってきたようだ。「草、これから一つ手合わせをしようか」

草の父はそう言つて手に缶ビールを持っている。見た目はしっかりと息子の姿をしているだろうが、中身は剣道をやったこともない素人だ。茶々は、手の平をヒラヒラさせながら言う。

「ムリムリ、そんなんやったこと、あらへんもん」

ゴトン。とく、とく、とく。うん？と思つて、草の父親を見ると握っていたビール缶を落とし、その缶の口からはビールが零れている。あつという間に、食卓はビールの海になってしまっている。しもた。

「今日、体調、悪い」

草の真似をして茶々は言つと、風呂場へと逃げる。そう言えば、茶々と草ではあまりにもタイプが違うのだ。いつもどおり振舞つては、トッチ狂った。と思われてもしかたない。

「気いつけなあかな」

茶々は服を脱ぎ、浴室にはいつて椅子に腰かけると呟く。ふと、視線に映った草の勲章を見て、寂しそうに呟く。

「なんやちゅうねん」

草と真子は、憂鬱そうな顔で一時間目の国語を受けている。寝て起きてもやはり無駄だった。草は真子の体のままだし、真子も茶々の体のままだ。ということは、茶々も草の体のままだろう。まだ、学校にはきてないけど。遅刻魔だから。

「茶々だ」

ガラガラ。と教室の戸があいた。いつものように、茶々が重役出勤をしたのだ。でも、それは、真子と草にとってはの話しで。

「碧河、どうした？お前が遅刻なんて、具合でもわるかったのか？」
みどかわ

碧河は草の苗字だ。茶々には、いつも「たまには早く来い」と言う国語の教師も、見た目が草のため心配そうに言った。草こと茶々は、無表情のまま「すみません」と一言だけいうと、自分の席にいった。

「茶々、草のまねしてるのかな？ふふふっ」

「……………」

茶々はあいている草の席に座る。草と真子は隣りの席、茶々は二人の前に席があるのだ。でも、今は茶々と草が後ろで、真子が前になっている。二人の顔を見て、茶々がほっとしたような顔をした。しかし、直ぐに無表情に変わる。

「茶々、それで草のつもり？目つりあがってるよ」

「うるさい。どんだけ大変かわかるか。この石造フェイス」

「くすくす。ただのしかめ面じゃん。ねえ、草？」

草は真子の言葉に頷く。人の苦勞もしらず、のんきなことを言う二人に拗ねて、茶々はノートも広げずに机の上で顔を伏せた。寝る気満々だ。

「草が授業中、寝たことあったけ？」

真子の言葉に、草は首を振ってそれを否定する。真子はおかしそうに茶々を見ていた。ヒソヒソ、と話していた真子たちの所に教師がくる。

「碧河、大丈夫なのか？」

教師の言葉に草が頷く。しかし、教師の目には真子に見えるのだ。真子が無表情のまま頷いたように。そして、真子は茶々を揺り起こす。教師の目には、茶々が草を起こしているように見える。

「ほら、おきなよ。ノートくらいひろげたら」

教師は変な顔をして、茶々を見る。それから、机の上に開かれたノートが見えた。そして、驚いてそのノートを取りあげる。驚愕だったのだ。教師にとつて。

「どうしたんだ。茶々、お前がこんなに事細かにノートを取るなんて!!」

真子はいつもノートを綺麗にそして、細かくとっている。しかし、茶々は涎がついていたり板書も抜けていたりして、滅茶苦茶なのだ。100パーセント試験の時には役に立たないノート。それが、茶々のノートだ。しかも、そのまま提出する物だから、教師からすればある意味、忘れられないノートである。

「いやあ、そうでつかあゝ。いつもとかわつておらんと思いますけど…」

真子は、しまった。と思い慌てて、茶々のふりをして変な関西弁を使う。中身が入れかわっている何てとても説明できない。

「三崎^{みさき}、茶々と碧河は大丈夫なのか？」

教師は心配して真子に聞いているが、それは中身が草だ。草は真子のふりをして、「大丈夫です。心配ありません」と言ったが、その表情が、ぴくり。とも動かない。

「そうです。オレら、ホンマに大丈夫でっせえ」

真子に合わせて、草も頷く。しかし、教師の目には二人がとてつもなく異様に見える。ぴくり、とも表情を変えない物静かな真子と急激に真面目になった茶々。

「ダァー！何やねん、その関西弁。聞いたってメツチャ気持ち悪いわ。耳が変なる！！」

高々と言って起き上がったのは茶々だ。教師の目には草。そして、教師は手にしていた教科書もノートも落としてしまった。いや、教室にいる誰もが、持っているシャーペンを落としたのだ。そのまま、固まって草と茶々と真子を見ている。

「この、バカ」

「また、また、やってもうた……」

茶々がそう言う。真子は額を押さえ天を仰ぐ。草は小さな声で「俺じゃない」と言うだけだ。

何とか昼時間まで耐え切った3人に衝撃の事件が訪れたのは、英語の授業が終わった後だ。文化祭実行委員の子が3人の所にきて「1時50分から、ステージで文祭の練習があるから」と言ったのだ。それを聞いた3人は、衝撃をうけて引きつった顔で「わかった」と答えるのが、精一杯。3人とも、大道具や衣装などの裏方ならよかったのだが。

「ああ、すっかり忘れてたああ」

いつもの屋上で、絶望的な声をだして頂垂れているのは真子だ。茶々は呆けている。

「お前は、まだええで。オレらなんて男同士でラブシーンやらアカン」

茶々の言葉に、草は頷く。心なし草の表情がとてつもなく嫌そうだ。配役はこうだった。草と真子が主役で恋人同士。茶々は横恋慕をする役目だ。しかし、今は中身が違う。草と茶々が恋人同士で、真子が横恋慕の役。

「とりあえず、台詞覚えなアカンよな」

そう言って、覚悟を決めたのか茶々が台本を広げた。ステージ練習が始まるまでの間にある程度、台詞を覚えておかなければならないことになっているからだ。

「そうよね。とりあえず、覚えなきゃ」

茶々に賛同して、なんとか持ち直した真子も台本を開くと、ブツ。言い始める。草も同じように台本と向き合い始めた。その後は無言のまま、それぞれが台本と睨めっこだ。

「どうして、ラブシーンからなのかしら…」

ステージの上で見つめあっている草と茶々を見て、真子が言う。ビジュアルはちゃんと真子と草なのだが、どうしても、真実が。

「私の愛しいメアリー、僕を愛しているとその可愛い口で囁いておくれ」

「愛してます、セニョール様。何度でも私は言いましょう。愛していると、何度でも」

真子こと草は、無表情の上に棒読みだ。いや、一本眉間にシワができている。草こと茶々は、一見、熱弁をふるっているが、口角が上がり、ぴくぴく。と動いている。

「おおう、メアリー君は何て美しく可愛い人なんだ。僕を虜にしてやまないよ」

草こと茶々が、そう言っ真子こと草を抱き寄せる。そして、顎に手をあてて上向かせる。ここで本来なら、うっとりしなければならぬのだが、草は無表情な中にも、げっそりとした表情を見せていた。

「ちよつと止めて。こんなのじゃダメよ」

そう言っ芝居を止めたのは、この劇の監督をしている女子だ。

彼女は、メガホンを口にあてて真子こと草に熱弁を始める。

「三崎さん、もっと感情を込めて。目の前のセニョールを心から愛するのよ。愛しくて愛しくて、自分の全てを捧げておかまわない。思いながらやってくれないやダメよ。いい、もう一度、始めからいくわよ」

草は、こくこく。と頷くと再び、茶々に向き直った。しかし、この繰り返し、後5回は続く。

「あんた達、何やってるのよ!」

我慢の限界を超えて、怒鳴りながらステージに上がってきたのは、茶々こと真子だ。あまりの醜態に眠っていた役者根性に火をつけたのだ。真子は元演劇部部长。

「いい、草。ちゃんと見てなさい！」

茶々こと真子はそう言っていると、胸の前で手を組み、うつとりと草こと茶々を見つめて芝居を始めた。

「愛しています。セニョール様。何度でも私は言いましょう。愛している、何度でも」

突然の出来事に、草こと茶々は戸惑いながらも、台詞を言い始める。

「あ、ええっと…メアリー、君は何て美しく可愛い人なんだ。僕を虜にしてやまないよ」

そして、同じように顎に手をかける。上目づかいに見つめてくる視線は、恋の熱を帯びて潤んでいる。しかし、目に映るのは自分の顔だ。

「セニョールさま……」

茶々こと真子が、ゆっくりとうつとりと目を閉じ、そつと唇をさしだす。茶々は正直、戸惑う。自分の顔がそんなことになっているのだ。しかし、芝居を止めていいのか。どうなのか。陶醉しきっている真子に、戸惑いの視線をむけるのが、精一杯だった。

「キモイ」

草の言葉と手刀に真子が、はつと我にかえった。そして、気まずそうにステージの下を見ると、その場にいるクラスメート達が口を開けたまま、ぽかん。としているのだ。

「はははは、わかったか。真子。オレぐらいの演技しなあかんよ。はははは」

茶々こと真子はそう言つて、ステージから飛び降りる。そう言えば、今は茶々なのだ。これでは、草と茶々がラブシーンをしたことになってしまう。

「アカン、オレの人生終わった……」

茶々はさつていく、自分の後姿を見て力なく呟いた。その言葉に、草も同じく頷く。男同士で、ラブシーンをしなくてはならないだけでも、ダメージなのに……これは喜劇をこして、惨劇だ。

茶々と草は、日々やつれている。何の解決策もないまま3日がたっている。何度、本を読み直しても、どれだけその系統の本をあさっても、意味がなかった。もちろん、同じように儀式を試してみたが、効果すらない。

屋上のフェンスにもたれながら、パンを食べている茶々の目の下には隈ができている。ぼそぼそ。とパンを食べてはいるが、今にもパンを落としてしまいそうだ。草も草で、いつもの無表情に精気がない。

「……むり……」

何かに耐えられなくなつたように、草が呟いた。その言葉を聞いた茶々が、ぴく。と反応し、狂気じみた叫び声をあげる。

「どうしたのよ。二人とも!？」

『怪しい魔術書』と書かれた本を読んでいた真子は、驚いて二人を見る。茶々は頭を抱えて叫び、草はパックのイチゴみるくを、ぶくぶく。させている。そのイチゴみるくが溢れて、指の間から零れている。

「ああああああ、アカン。もう、耐えられへん!!!」

ただ事ではない声をあげて、茶々が頭を掻き毟っている。そして、真子に土下座をした。

「頼む。オレを真子の所にひきつとつてくれ!!!」

「俺も」

茶々の言葉に便乗して、草が言った。草も同じように隣りに正座すると頭を下げる。二人とも、普段の自分とはあまりにも違う生活、性別を演じなくてはならなかった。学校でも、家でも。しかし、真子にはそのストレスはない。だって、茶々は一人暮らしだったからだ。

「ダメよ。いつ戻るかわからないし。それに、どうやって、親に言うのよ」

もつともな意見を言う真子に、茶々は縋るように足をつかむ。草のふりをして、生活するのはもう耐えられなかった。つらい、つらい、つらいよ。

「そんな殺生なことゆわんと、頼む。このままやったら、オレ狂ってまう」

真子が困って草に目をむけると、草も茶々の意見に頷いている。よく考えれば、他人のふりをして生活しなければならない二人が気の毒。

「しかたないわね」

真子は溜息をついて、二人にそう言った。放課後、自宅に帰って着替えや必要な物をそろえてから茶々の家に集合することになったのだ。しばらく、3人で暮らすことにした。

草こと茶々は、草の部屋にきていた。ボストンバックに必要な着替えや歯ブラシ、頼まれた本と画材道具だ。草は絵を描くのが好きだ。それと、読書。読みかけの本が枕元にあるらしい。

「ええっと、後はスケッチブックと…筆箱…」

勉強机の引き出しを開けて、茶々は頼まれた物を探す。探し物はあっさりと見つかった。上から二番目の引き出しにはいつていた。

「しかし、きっちり残しとんやな」

机の本棚を見て、茶々は呟いた。書きおえたスケッチブックが、日付をつけて並べられているのだ。その中から一冊とりだす。

「去年の奴やな」

茶々は、表紙をめくった。そこには、春の花が書かれていた。他にも建物や看板、生き物など、模写がほとんどだった。色がついている物、鉛筆だけで書かれている物。それぞれだが、そのどれもが上手い。

「やっぱ草の奴、うまあ描きよる」

茶々は感心して、また一枚、一枚とめくりあげる。そして、手を

とめた。建物や物、昆虫や鳥などがほとんどだったスケッチブックに突然、人があらわれたのだ。優しいタッチで繊細に描かれている笑顔。

茶々は表情を曇らせる。そして、直ぐにスケッチブックを閉じると、元の場所へと戻した。それから、荷物をまとめて部屋を後にした。

これが、1時間前のことだった。あれから、茶々は直ぐに真子の待っている部屋へと急いできたのだが、草がいつまでたってもこない。

「なあ、草のやつ遅うあらへん？」

「そうよね。何かあったのかな？」

真子はそう言うと言った。その時、草からメールがきた。「あ、草から」と真子が言う。茶々はそんな真子の横顔を複雑な気持ちで見ていた。あのスケッチブックの日付は、茶々たちが始めて屋上に集まった日くらいだった。草のやつ、もしかしたらずつと…

「茶々、大変！これ見て」

真子がそう言って、携帯をさし出す。真子の携帯を取り上げながら「なんや」と画面を覗く。そこには『死ぬ。助けて』と打たれていた。

「何やこれ？」

茶々は困惑して眉を歪める。何があったのかわからない。しかし、真子は違ったようだ。何かに気づいたようにハツとする。

「しまった！工事の日だった」

「何のことや？」

「とりあえず、いくわよ」

茶々の質問には一切こたえず、真子は草の元へとむかった。もちろん、茶々もだ。

真子と茶々が草の所にいくと、草はうずくまって油汗を流していた。それを見た茶々は驚き、草にかけよる。

「草、どうしたんや！」

「草、ちよつとごめん」

しかし、真子は冷静なものだ。それだけ、断りをいれるとスカートの中を見た。真子の行動にギョっとしたのは茶々だ。やられている草はそれどころではない。腰と腹部が痛く、下半身が動かすのも億劫なほど、ダルイ。

「お前、何しとんねん!？」

「やっぱり…大丈夫よ。病気じゃないから、それよりお風呂に運んで」

真子はそう言う到着替えをだし、部屋を出て行こうとした。しかし、何が起こっているのかわからない茶々は、そんな真子に。

「大丈夫って、こんな苦しそうにしてるのにか」

冷たいように見える真子の態度に、茶々は非難がましい声で言う。真子は、ピタッと動きを止める。

「だから、病気じゃないって言ってるでしょ。心配しなくても大丈夫よ」

「大丈夫って、こんな苦しそうなんか。しっかり説明せい」

「だから……」

真子は、ぎゅっと拳を握り締めると、顔を真っ赤にして叫んだ。

「月に一度のやつよ!!!」

「へえ?」

茶々は一瞬なにを言われたのかわからず、逃げるように去っていく真子を見送る。そして、それから、ぐるぐる。考えて、真っ赤になった。

「マジっすか…」

腹部を押さえて苦しそうにしている草は、かたく目蓋を閉じて苦しそうに呻き声をあげている。普段、無表情な草が明らかな苦痛を露にしているのだ。ハンパねえ。

草は脱水所でぐったりとしている。草は外でまたせてある。とりあえず、草に薬を飲ませた方がいい。いつもののは、極力飲まないよ

うにしているけど、そうは言ってられないよね。

「草、これ飲んで。それから、お風呂はれたから入浴して」

草は薬を受けとる。草の体は冷え切っていて冷たかった。体が冷えると痛みもだるさも増す。暖めてあげないと。

「ああ、それと目隠ししてね」

薬を飲みおえた草に目隠しをすると、服を脱がせていく。薬を飲んでほっとしたのか草は、冷静になりそれともに戸惑いがおきる。

これは真子の体だ。体の持ち主に任せるのが…得策。

「真子…」

草が苦しそうな微かな声で言う。草には伝えなければならないことがあった。この3日間、まったく風呂にはいつていないのだ。真子の体だし、無断で見たり触ったりするのは、ちよつと。そんな思いで、風呂にはいれなかった。

「どうしたの？気持ち悪い？バケツいる？」

痛みだけじゃない。吐いたりすることもあるから、真子は草が吐くんじゃないか。と思ったのだ。

「違う…体、洗って」

「え？」

真子は草が何を言いたいのかわからなかった。あまり体を動かしたくないはずだ。座っているだけでも辛いはずなのに。

「3日、洗ってない」

「ええ、どうして!？」

その言葉に真子は驚き、草を覗きこむ。そういえば、髪の毛もしつとりと油っこい。匂いは…ちよつとする。

「真子の体だから」

草の言葉に、事情を察した真子は感激して抱きつく。草のそういう心遣いが嬉しかった。茶々なら間違いなく、風呂にはいつてじつくり体を見ている。

「草、本当にいい奴。やっぱり茶々とは違うわ」

真子が感激して、草に抱きつく。草は少し戸惑った。茶々の体に

抱きしめられたけど、中身は真子なのだ。なんだか複雑だ。

真子は初日こそ、戸惑い風呂にはいれなかったものの。2日目には、お風呂にはいつていない気持ち悪さに耐えられず意を決して、風呂にはいったのだ。まあ、男の体だし。と自分を勇気づけながら「いいよ。隅々までピカピカにしてあげる」

草の体を支えながら、浴室の椅子に座らせると真子はシャワーをだして、満面の笑みを浮かべた。草って、何て紳士でいいやつ。

「私の秘密は、月に一度“工事の日”があることよ。男のあんた達には、わからないだろうけど、すーんごく辛い。工事のドリルでガガガってやられてるみたいに、痛い、ダルの、なんのって」真子の言葉に体験済みの草は、うん。と頷く。茶々は、どんなやねん。とひきつった表情を浮かべた。

「それで、ちよいちよい休んどったんやな」

「そういうこと。これで、私の秘密は終わり。茶々と草はどうなのよ？」

真子は自分の、知られたくない秘密を暴露した。二人は、どんな秘密を持っているのだろう。

工事の日があまりにもキツイ。本来なら、理解者であるはずの女友達にも、理解されにくいほどキツイのだ。始めのうちは心配そうな態度を見せてくれても、回数を重ねれば、またか。という感じになる。それが、申し訳なくて、そして、悲しかった。

「俺、真子を大切にする」

真子の苦しみを体験した草は、ぼそぼそ。と言ってくれた。真子は始めてできた理解者に嬉しくて、「いい奴」とほっぺにチューをする。チューと言っても、自分にチューしている気分だ。

「……………」

茶々はそんな二人を見ていた。草は無表情で感情がわかりにくいから、今まで気づかなかったのだ。草が自分と同じように真子を好きだっことに。

「そやけど、オレには秘密なんてないしなあ」

茶々はそう言って、寝ころがる。草にも真子にも言っていない秘密。それを言うには、まだ勇気が足りない。それを言ってしまったら、3人の関係が変わってしまうから。もう少しこのままでいたい。とは言っても、自分の体も恋しいのだが。

「ちよつと、茶々どうしたの？顔」

「え？」

真子が驚いて言う。草こと茶々の顔が、びくびく。と痙攣をおこしているのだ。茶々は草の顔に触れながら「またか」と一言。

草の表情筋が悲鳴を上げているのだ。普段、あまりにも使われないせいか。直ぐに痙攣を起こしたりする。実は、首まわりや目尻の所など筋肉痛で痛いのだ。

「ああ、表情筋のつかい痛め」

茶々はそう適当に説明すると、顔をマッサージする。真子は「そっか」と納得の声をあげた。表情豊かな茶々とあまり表情にでない草では、使っている筋肉量が違いすぎる。

「草が、むつつりスケベさんやから、オレの明るい性格とはあわんのや」

茶々の言葉にムツと眉をよせた草が、茶々の首をしめる。茶々は大げさに「ゲエ」とひき潰された力エルのような声をあげる。

「……死ね」

「そやかて、草ちゃんも男の子やもん。あゝあんなことや、こんなことを考えては、ムハムハ……ぐふっ」

「……………」

不機嫌な草の声に茶々はこたえたが、草からのかえしは、ぐぐぐつと強められた指の力だった。茶々は草の腕に、ギブ、ギブ、とギブアップを伝える。き、気管が。

「草、本当に死んじゃうから」

真子が草をとめる。茶々は、ゲホゲホ。と咳き込む。羽交い絞めにされて草は不服そうな表情を浮かべたままこちらを睨んでる。そ

こで、ふと気づいた。

「むつつりマシになつとる」

「……………」

草は、再び、ムツとして茶々に襲いかかる。茶々は慌てて草の両腕をつかむ。また、首をしめられては適わない。とは、言ってもこうして両腕を押さえてしまえば敵うはずない。だって、男と女の体では力が違う。

「ははは、まあ、怒んなよ」

まったく適わないことに草が、さらにムツとしたのを感じて、茶々は勝ち誇った声で言う。そして、ふと、窓ガラスに映る自分と草の姿を見た。ガラスの中では、草と真子がじゃれあっている。

「草に失礼でしょ!」

真子が茶々の頭を叩く。ただでさえ痛い真子のツツコミが、男の力で倍増されている。反動で倒れてしまった。

「痛った。お前なあ」

加減せい。と注意しようとして、真子こと草の上に覆いかぶさっていることに気づいた。慌てて起き上がろうとして、草がガラスに映る自分を見ていることに気づく。そして、同じようにガラスの中を見て、後悔した。

「お前な、よう考えてみ。これ、草の体なんやで」

何事もないように真子に言う。草はもう起き上がっていて、無表情のまま何かを考えている。真子を好きな草は、どういう気持ちで真子を見ていたのだろう。まあ、オレが真子を想っていることは気づいとらんやろけど。

「そうか。草、ごめんね。それより、お腹すかない?」

「おお。真子、作るんか」

茶々の期待満々の言葉に真子は「えへ。できる訳ないじゃん」とあっさり答える。近頃の子で、料理ができる子ってどれくらいいるだろう。はあ、男はわかってないわ。

「なんやねん。ガッガリさすなや。じゃあ、何か買いに行く?」

茶々はそう言って立ち上がる。どっちにしる買い物には行かなければならない。冷蔵庫には、氷とビールくらいしかない。しいていえば、キムチとか、アイスがあるくらいだ。

「俺が作る……」

草がいった言葉に、二人が不安そうに草を見た。草は無表情のまま二人を見かえす。訝しげに真子が草に言う。

「できるの？」

「そや、カップ麺とちやうで？」

草が台所にたっているイメージをもてない二人は、疑心暗鬼にかけられている。しかし、当の本人は、こくん。と頷いて言った。

「いつもしてる……」

そして、2時間後。テーブルに並ぶ料理の数々に、二人が感動の涙を流しながら貪り食っていたことは、言うまでもない。

茶々は寝静まった静かな部屋で、悶々としていた。草の気持ちを知ってしまった。どうしても、自分の心にだけ閉まっておくなんてできない。しかし、草にそのことを告げるなら、自分の心も曝けださないといけない。

笑って「応援してるで」何て、そんなことはフェアじゃない。もし、自分がされたら、バカにされた。と思ってしまう。友達だからこそ、正々堂々とむかいあってほしい。

「茶々……」

草に呼ばれて、茶々は起きあがり「どうしたん？」と覗きこむ。眠る前に痛みがぶり返してきた草は、薬を飲んで横になったのだ。

「痛いんか？真子、起こしたほうがええか？」

心配そうに言うと、草は首をふって「大丈夫」と言った。どうやら、痛みはないらしい。男の茶々には、想像もつかないが、あの草があんな風に蹲すわったくらいだ。想像を絶するのだろう。

「茶々、変だ」

草はいつもの口調で言う。ばれていないつもりだった。いつもど

おり平然と接しているつもりだった。それなのに、草は見抜いていたのだ。草の言葉に、覚悟を決めると眠っている真子を見た。見た目は自分だが、中には真子がいっている。

「なあ、外に行かへん？」

真子のいる所で話しをするのは、まだ抵抗がある。まずは、二人で話しをしたかった。茶々の雰囲気を読みとって、草は頷く。茶々が何かを話そうとしているのを感じとる。そして、それが大切なことであることも。茶々は直ぐ表情にでるから。

男二人で、暗い夜道を歩く。深夜の時間。誰もいない高台まで歩いていった。体がだるい所為で思ったように歩けない。薬を飲んでいても、まだもう少し効いていないのかもしれない。高台で足を止めた茶々にあわせる。

「あんな…その…なんちゅうか…」

いつも歯切れのいい茶々が言いにくそうに、歯切れの悪い言葉を連ねている。草は茶々が、何を言いたいのか、伝えようとしているのか、黙ったまま待つ。

「……………」

沈黙が訪れる。いつもの茶々とは違う雰囲気、草は戸惑っていた。そして、茶々が自分の秘密を話そうとしていることに気づく。誰だって、自分の秘密を他人に曝けだすには、勇気がいる。草だって、茶々や真子に言えないことがあった。今でも知られたくないと思う。変化が怖いから。

自分の秘密を曝すということは、多かれ少なかれ変化がある。今の現状が満たされたものなら、なおのことその変化を嫌うし、怖い。「スマン…！」

急に茶々が大きな声で頭を下げた。後頭部が見えるくらいに下げられた頭を、草は無言で見ている。茶々が何を謝っているのかわからない。

「……………」

「ホンマにスマン。オレ、スケッチブック見てもうた」

「……………」
茶々の言葉に驚き、草は茶々が何を知ったのかわかった。真子と茶々に秘密にしていること、それは、真子のことが好きだったこと。始めてできた友達。始めてできた自分の居場所を壊したくなかった。茶々の気持ちを知っているから。

「俺は真子が好き。茶々の気持ち知ってた」

「……………」

今度は茶々が無言になる。草にとって茶々は、初めての男友達だった。茶々は草と違って友達はいたが、心友といえるような友達ではなかった。でも、草は違う。

「オレは、草のことも、真子のことも、好きや！今のままの状態を気にいっとる」

「……………」

草は黙り、茶々の言葉の響きを聞いている。草も同じ気持ちだ。草はずっと茶々の気持ちに気づいていた。茶々は何でも直ぐに表情にでるから。

「何で黙んねん。草が何も言わへんし、何も表さへんから。オレ、ずっと気づかんと」

茶々は草を責めながら、自分を責めてもいた。何でも上手く隠してしまう草にも、鈍感すぎる自分にも、何もかも嫌になる。

「…………… 答えがない」

拳を握りしめて俯く茶々に、草は呟く。ずっと考えていた。どうすべきなのか。諦めるべきなのか。でも、諦められない想いも…答えなんて見つからなかった。そのまま、伝える。

「……………」

「……………」

パン！

パン！

急に茶々が自分の顔を叩いた。そして、そのままの勢いで、草の顔も叩いたのだ。草は何が起きたのかわからず、驚いて茶々を見る。

茶々の顔は、さっきほどまでとは違い気合のはいったサツパリした顔をしている。

「くだくだ考えるのは、性にあわん。草、これからは正々堂々勝負や。オレと二人で真子に『好き』やって言う、覚悟きめろ！」

短絡的というか、何と言うか。茶々らしい、と草は思う。シンブルで豪快な茶々の思考に、草は思わず笑みが零れた。

「おつ、オレ始めて草の笑った顔みた！」

茶々が嬉しそうに言う。先ほどまでの重い雰囲気とは違い、いつもの雰囲気に戻っている。茶々の指摘に、草は恥ずかしくなって直ぐに表情をいつもの無表情に戻した。

「笑ってた方がええで、草ちゃん、メツチャかわいい！」

からかうような茶々の声に、草はグーで答える。ばぎつと音が鳴った頬を擦りながら「何すんねん」と抗議の声をあげる。

「お返し……」

「オレのは平手やったやんか！グーじゃ、つりあわん」

草は、ふん。とそっぽを向く。背後から羽交い絞めにしてきた茶々に抵抗しながら、二人はじゃれあっている。息が上がるほど、揉みあいながら草は、茶々から離れて、真っ直ぐ茶々を見つめた。

「勝負」

「おつ、受けてたつたる。負けへんからな」

茶々はそう言って、笑った。くだくだ、考えてもしかたないのなら、行動した方がずつといい。後腐れなく、正々堂々と勝負した方がいいに決まってる。

草と茶々が心をさらけだしてから2日。いつこうに自分の体に戻る気配はない。

茶々と草は、互いにゴミ箱を手にとって、てく、てく。と廊下を歩いていた。ジャンケンに負けてゴミ捨てをしなければならなくなつたのだ。真子は教室で二人がもどってくるのを待っている。

青春映画のように爽やかに覚悟を決めた二人は、あの威勢のよさと

は違い、未だに真子に告白できずにいる。

「草、お前。真子に告白するんちゃうん？うじうじやってたらアカンで」

茶々は自分のことを棚にあげて、草にけしかける。草は無表情な顔を茶々にむけて言う。

「茶々こそ」

「オレは、草に恩売ろう思ってたやな」

草の瞳に苦しい言い逃れをする。草はそんな茶々に、一言で答える。

「いない……」

二人の間に無言が流れる。つまり、二人とも意気込みだけで、後は尻つぼみなのだ。どちらかが行けば、勢いづいてきつかけになる。真子へ自分たちの秘密を伝えることは、すなわち愛の告白である。告白した以上、返事を聞かなくてはならない。草か、茶々か、もしくは両方ふられるかのどれかだろう。

ゴミ捨て場に到着した二人は、くだら。とゴミの仕分けをする。紙のパック。ペットボトル、缶に紙。それぞれを決められたゴミ箱にいらていく。二人は黙々と作業をしていた。

「きつかけ」

茶々はそう呟いた草に、目をむける。草はゴミを仕分けする手を止めずもう一度言った。

「きつかけ、欲しい」

草の言葉に、茶々も作業を再開して「きつかけなあ」と呟いている。

確かにあまりにも3人であることに慣れすぎてしまって、きりだすタイミングがわからないというのも事実だった。

ゴミ箱を空にした二人は、行きと同じ道を歩いて教室へとむかう。茶々は、ふと一年坊主が、オセロをしているのを見つけた。そして、ピン。ときたのだ。

「そや、草。こうしよう」

茶々の言葉に草は茶々が、何を考えついたのか。と思いながら見る。何かいい案でもあるのだろうか。茶々は草の肩に腕をまわすと、ヒソヒソと思いついた名案を話しはじめた。

「……て訳や。そのためには入手せなあかん」

草はこくん。と茶々の案にのつた。バカな案だが、ないもしないよりはました。教室に着いた二人は待つていた真子に言う。

「真子、悪いけど先に帰っててくれへん？オレら、用事ができてもうたんよ」

茶々の言葉に、真子は「用事？」と訝しげな返事をかえした。そして、草を見る。草は、こくこく。と頷いて、真子に返事をかえした。

「何の用事よ？」

「男には、男にしかわからん。用事があんねん。なあ、草」

「そう。男の用事……」

草と茶々を見ながら「怪しいわね」と真子は、何か勘ぐるような仕草を見せたが、「まあ、いいわ」と言う、あっさり鞆を持って教室を出て行くこととする。自分だけ仲間はずれにされて拗ねた気分だ。

「すまん。早よう、戻ってくるさかい」

茶々の言葉に「わかったわよ」と真子が答えて、教室を出て行った。茶々と草はにこやかに、真子を見送った。

「よし、草。いくで」

茶々はそう言うて、勇ましく鞆を持つ。草も頷きながら鞆を持つて、教室を後にした。

真子は激浮きのショッピングモールにいた。ちょっとした憂さ晴らした。最近、色々あったから気分転換。女の子らしく買い物は大好き。

女の子の服を取り扱った店が並ぶとおりを歩いている。こんな所に男がいるとしたら、彼女連れだろう。

すれ違う人達の奇異な目を、気まずく受け止めながらも真子はめ

げずに進む。男子高校生の体は、あまりにも浮きまくりだった。

「あつ、かわいい」

ふと、目に入った下着売り場のブラとショーツに目がとまる。ここで、足を止めては変態なのだが……つい。

「えっと、サイズは……」

手にとつて見ると、サイズはちょうどA65。値段もセールでお手ごろな1000円だった。ついつい、その興奮で、今は茶々の体であることが吹き飛んでしまった。

「あの、お求めになりますか？」

店員のためらいがちな声も気にすることなく「はい、買います」と言ってしまう。誰だつてあると思うが、運命的な出会いを感じる商品というのは、出会った瞬間からもうどうしても欲しくて。出会った時の衝動は押さえることはできない。まさに真子もその状態だ。「……うん？」

しかし、ふと視線を感じて振り返る。同じクラスの石田君が彼女と一緒にいた。どうやら、この視線は石田君のものらしい。

ちよつと、買うのは気まずいかも。誰だつて、同じクラスの男子に下着を買う所を見られるのは嫌だ。キャンセルしようとして、真子はハツと気づく。ピカピカに磨かれたステンレスの柱には、男子高校生の姿が映っているのだ。しまった。と思つても、もう遅い。

「あの、プレゼント用で……」

少しでも茶々の名誉を守ろうとそう言い濁したが、守れたどうか。店員は「わかりました」と事務的な返事をかえして奥へと消えていった。自覚したら最後、ここにるのが居づらくて、居づらくて、しかたない。

やつとの思いで会計を済ませて、逃げるように茶々の家に帰った。真子が帰り道、まだ茶々でよかった。と思つたか、そうでないか、はさだかではない。

「茶々に一生の秘密ができたかも」

部屋に帰つて一息つくと真子は呟いた。草と茶々はまだ、帰つて

きていない。

「あつ、でも、暴露しないと元にもどれないかも……。まあ、いいよね。男子高校生が女の子の下着を買っても、普通、普通」

真子は開き直って、一人で、ははは。と乾いた笑い声を上げた。

その時、玄関が開いて、草と茶々が帰ってきた。

「真子、勝負やで！賭けオセロしよ」

「たのも」

茶々はオセロ板を高々と掲げ、草は3色の駒を持っている。独白ルールのオセロをするつもりだ。

「いいのかな。そんなこと言って、真っ裸にさせるわよ」

真子はオセロが得意だ。コンピューターを相手する時は一番レベルの高い所からはじめる。不敵に笑う真子に、茶々はオセロ板を勢いよくおく。

「賭ける物は？」

「秘密」

と草が答える。しかし、真子に秘密はない。

「それじゃ、私は……いや、秘密でいいや」

ついさっきの事故を思いだして、真子は言った。茶々に秘密ができてしまった。死守しなければ。というより、懺悔の必要があるなら負けるはずだ。負けなかったら墓場に持つていこう。

「いざいざ、尋常に勝負や」

茶々の言葉を合図に、それぞれ手をだす。パーで真子の一人勝ち。真子は早速、自分の駒を置いた。このオセロ、3人でやること以外ルールは普通のオセロとかわらない。手を組んで、一人をしとめるもよし、単独行動で三つ巴もよし、3人で楽しむための独自のルールだ。

パチ、くるくる。パチ、くるくるくる、パチ、くる。パチ、くるくるくるくる。

3人は真剣な表情で、駒を置いてはひっくりかえす。

「やった！一人勝ち！！」

真子の腕が「バンザイ」と掲げられる。とりあえず、秘密は死守した。茶々の姿で、下着を買ったあげく、同じクラスの石田君に見られていた。そんな酷いこととも言えない。

「さあ、二人とも秘密を暴露してください」

茶々と草の狙いどおり、真子の一人勝ちで終わった。名目上は“罰ゲーム”という、きっかけが欲しかったのだ。何気ない会話の中では、つかめないなら強引でもこうして、そういう場を作った方がまだ、言いやすい。

「ゴホン。まあ、ちゃんと座れ」

茶々は改まって座りなおす。真子は、それはそうか。と思いながら、茶々と草に習ってきちんと正座をする。

「草から、言う？」

この場にきてまで、往生際の悪い台詞がでる茶々。草は、無言で真子を見つめ、そのまま沈黙。

「で、何？」

草が何を言いたいのかわからず、真子は思わず言ってしまった。その言葉の冷たさに言われた方ではない、茶々の心が挫けてしまいうさだ。

「真子……」

草は、すうー。と深呼吸をすると真子に言う。たった一言に、隠してきた秘密をこめた。

「……好き……」

真子は理解できないように眉を寄せて目を細めている。そんな真子を茶々も真っ直ぐに見つめた。そして、草に遅れて茶々が真子に伝える。

「オレも、真子が好きやねん」

草と茶々の言葉が、だんだんと真子の頭に浸透して、言葉の理解ができると共に、だんだん目蓋が重たくなってきた。そして、そのまま意識を失った。次に目を覚ました時は、3人は元の自分の体に戻っていた。

元の体に戻って3日。3人は何となく、距離をとって生活している。特に真子が酷くて、二人と目もあわせられない。

あの無責任な呪いの所為で、真子の頭は混乱気味だ。確かに真子は、草も茶々も大好きだ。けど、それは友達としてだけで、恋人とか、恋愛とか、いうニュアンスとは離れている気がする。

二人とも断ったら、また、3人でいられるのかな。それとも、茶々か草、どちらかを選べば、どうなるのかな。真子の望みは、今までどおり3人でつるんでいたい。しかし、どう返事をかえしても、そうはならない気がして。

草も茶々も、あれからそのことには触れなかった。真子の性格上、いい加減な返事はかえさないだろうし、今すぐ悩んでいるだろうと思うたからだ。

いつもの屋上には、真子の姿がない。真子は教室で、昼飯を食べている。

「なあ、今から、嘘だよ〜んって言いについたらるか？」

茶々が草に言う。草は、空を見上げている茶々を見ながら言った。気持ちを隠していたのは、真子を苦しめたくなかったからだ。

「意味ない」

「そやんな〜。でも、オレ今は答え聞きとつない… ような気がすんねんけど？」

意見を求められて、草は考える。確かに、そんな気もする。真子を好きな気持ちは真剣なものだし、茶々にだつて負けたくない。と思う。しかし、もう少し、せめて卒業して別々になるまで、いつもの3人でいたい。

「……………」

なかったことにできるだろうか。今さら、茶々は逃げ腰だな。と思いつながら自分も同じだけど。と思つて、空を見上げた。

憎らしいほどの太陽が青空を背に輝いている。二人が空を見上げていると、予鈴を告げるチャイムが鳴った。

教室に戻ると、真子がクラスの子と話している。ふいに、真子と視線があう。さっと視線を外されて、茶々は手の平で目を押さえた。

「アカン、重症や」

あんな風にあからさまに、視線を外されたら誰だつてへこむ。まして、それが告白した後ならなおさらだ。茶々は同士である草の腕をつかむと、そのまま教室をでて行った。

「どこいく……」

「オレのガラスのハートにヒビがはいったんや。とてもやないけど、あの席に戻るのムリやあ」

草は「一人でサボれ」と言おうとしてやめた。茶々の気持ちが変わらない訳ではなかった。真子、草、茶々は隣同士の席に座っている。あんな風にあからさまに視線を外されて、あの席で授業を受けるのは、気まずい。

草と茶々が教室を出て、数分を待たずして本鈴のチャイムになる。真子は自分の席に戻ると空席の隣りと前を見た。

つい目をそらしてしまったから、茶々が逃走したことはわかっている。草は巻き込まれただけだろう。優しい草なら、気まずくてもそのまま座って、普通に授業を受けようとしてくれる。茶々も優しいけど、草と茶々では優しさの示し方が違うから。

真子は、カツカツ、と書かれていく黒板を見ながらふと、手をとめる。そして、机の中からいらぬプリントをとりだす。

自分のノートを脇において、そのいらぬプリントの裏に板書を始めた。プリントへ全て書き終えてから自分のノートに書き写していく。

真子は、草も茶々も好きだ。茶々も草も、優しいし、気があうし、何より一緒にいて楽しい。でも、恋愛感情はないと思うのだ。たぶん。どこからがLikeでLoveなのかは、真子にはわからない。でも、何となくそう思う。

今までとかわらない3人でいたい。というのは、贅沢なのかし

れない。真子にだって自信がないのだ。二人の気持ちを知って、何も知らなかった頃のように接することができるかどうか。二人を断れば、二人だけは親友のままでいられるのかな。

結局、草も茶々も6時間目が終わっても帰ってこなかった。二人の鞆は教室にあるから、必ず、鞆をとりにもどってくる。

真子は鉢合わせにならないように、いらないプリントを茶々と草の席に2枚ずつおいて、自宅へ帰った。自分の中で答えをださないかぎり、真子はどうしていいのかわからない。

あの怪しい呪いをした時と同じように、教室が夕日で染まっている。もう誰もいないだろうと思って、帰ってきた二人は机の上にある二枚のプリントを見つけた。

「何やこれ？」

何週間も前に配られたプリントを見ながら茶々が言う。草もプリントを見ていた。草は、プリントを裏返して驚いた。

「裏……」

「裏？」

草に言われ、茶々もプリントの裏を見る。そこには、英語の授業の板書が書かれていた。草は、無言で自分の持っているプリントを茶々に渡す。草が持っていたプリントには、国語の板書が書かれている。

その4枚のプリントには、名前も何も書かれていなかったが、字を見ればわかる。角ばった所のない丸い文字は、真子の字の特徴だ。「変な字なんやから、気づくつちゅーねん。なあ、草」

茶々は真子の優しさにまいったように言う。草も気づいているのだ。真子がわざわざ、授業にでなかった二人のために板書をしてくれたことを。

「俺ら大切なこと言ってない」

自分の気持ちを伝えるのに精一杯で、真子への心遣いがおろそかだったことに気づいた。真子がどんな結果をだしたとしても、自分達は納得する。

また、今までと同じような関係を築こうと。時間が経っても、無理を重ねながらも、元通りの3人になろうと、草と茶々は確認しあつて、真子に自分の想いを伝えた。

しかし、真子はそんなこと知らない。草と茶々がこのままの関係を大切にしたい。いつもの3人でいたい。と思つているように、真子も同じように考えて、身動きがとれなくなつていいるのかもしれない。草はそのことに気づいたのだ。

「茶々、いこう」

「？」

草は茶々の腕をつかむとそのまま教室を出て行つた。茶々は引きずられながら、草に「どこに！？」と聞ぐが、草はもう聞く耳を持つていない。

真子は「お茶でもしない」と誘つてきたお母さんに付き合つて、キッチンのテーブルでお茶をしている。わざわざ買つてきたのだろうケーキもでてきたが、手をつける気にならない。

「はあ」

何度目かの溜息をつく真子に、お母さんは心配そうな目で娘を見ていた。この間からようすがおかしくて、気になつていたのだ。心配かけないようにと何も言わないわりには、表面にすぐでるのだ。

「真子、どうかしたの？最近のあなたおかしいわよ。恋の悩み？」

いつも通りの直球かつ確信をついたような言葉の切り出し方に、真子は気まずく押し黙る。

「無表情だつたり、言葉数が少なかったり、食欲もあまりなかったり、妙に礼儀正しかったり、おかしい所ばかりだったわよ。最近」それは中身が草だったからで、真子自身じゃない。しかし、そんなこと説明もできないので、とりあえず黙つていいることにする。

「もしもの話しよ」

「もしもの話しね」

真子の言葉に、お母さんは落ち着いて返してくる。どこまで“も

しも”と思ってくれているかは、なぞだがとりあえず“もしも”だ。
「親友同士の男の子が、同じ子を好きになって、同時に告白したとするでしょ。女の子はどう答えた方がいいと思う？」

「うっん、難しい質問ねえ。で、告白された女の子はどう思ってるの？」

もしもの話しが、かなり踏み込んだことになっているが、もう、流れにまかせるしかない。どうしても、いい結論がでないのだ。年寄りの知恵に縋りたい気分。

「さあ、そもそも、恋って何かわかってないじゃない」

「じゃあ、そう言えばいいじゃない」

「もしもの話しだから、これでおわり」

真子は、これ以上話すつもりはなかった。部屋に帰ろうと立ち上がると、来客を告げるチャイムが鳴った。お母さんに言われて、玄関のドアを開けると、そこには草と茶々がいた。

「話がある」

真子は突然あらわれた二人に、どうしていいのかわからない。草の言葉に頷くと、そのまま二人についていった。

3人は言葉を交わさないまま歩き続けた。そして、高台で足を止める。すっかり暗くなった空の下、一つ、また一つと明かりがともっていく。

ベンチに座り、くる途中で買ってもらった暖かい缶コーヒーを手で包みながら、真子は沈黙に耐えていた。切り出すには勇気がある。
「真子の好きにしていいいんだ」

草が切り出した。真子は何を言っているのか、と草を見あげる。返事を求められたのだと思って、真子の喉が鳴った。生唾が下っていく感覚がリアルに体に伝わっていく。

「…もう少し、待って。ちゃんと返事するから」

真子は草と茶々に言う。恋愛ごとに疎い真子は、どんな気持ちがあるかわからない。かといって、いい加減な返事もできなかった。草も茶々も、何がきっかけでそのスイッチがはいったのだろう。

「ちやうねん。オレも草も真子に返事を求めにきたんちやう」

草の言葉を補うように茶々が言う。真子は「え？」と戸惑いの声をあげた。じゃあ、何の話をしているのだろう。

「真子に言うの忘れとったけどな。真子が、どっちかふっても、両方ふってもかまわへん。オレらは、どうなっても3人でつるんでる草と決めたんや」

茶々の言葉に真子は瞬きでかえす。草はそんな真子の手を握って言った。

「3人、一緒……」

茶々も草に習って、片手だけをかぶせる。草は真子に言う。

「真子の正直な気持ちでいいから」

「そや、そや。素直に言ってくれたらいいねん。オレら覚悟できてるし。それで何か変わってしまうほどの関係なん？」

茶々と草の言葉に、違う。と思いつながら、真子はだんだん腹が立つてきた。ある意味、ほっとしたけど、ムカつきもする。勝手に投げかけて、勝手に話をまとめている草と茶々に腹がたった。どんなに悩んだか。

「何よ。それ!!」

すっかりいい感じにまとまっていると思っていた草と茶々は、真子の声に豆鉄砲をくらう。地面に缶コーヒーが落ちて、ころころ。と転がっていく。

「なんで、勝手に結論だしてるのよ。人がどれだけ悩んだか!!」

「いや、そやからな。オレらも色々あったんやで……」

真子の勢いに茶々がなんとか応戦しようとする。草は茶々の背後で、茶々を応援していた。

「そんなの知るか！何であるの時、そう言わないのよ。メチャクチャ気まずかったじゃない」

「すまん、すまん。オレも草も一杯、一杯で気まわらんかったんよ。なあ、草」

草にふると、草は激しく頷く。怒っていても告白そのものを否定

しない真子に、草は気づいている。茶々はどうか知らないが。絶対に「始めから言うな」とは言わないのだ。つまり、二人が真剣だったことをきちんと受け止めてくれている。

「ふふふ、いいわよ。今すぐ、返事してやる」

真子の挑発的な言葉に、二人は身構える。こんな急展開は予想しなかった。真剣な目で真子を見る。すうう、と真子が息を吸いこむ。

「そんなモノわかるか！」

真子の放った一言に「へ？」と間のむけた返事がかえってしまう。真子は、照れたように顔を背けると、二人に言う。

「どっちとか言う前に、恋したことないんだから、わかる訳ないじゃない」

二人に素直な気持ちを言っていていいと言われた真子は、心置きなく言い放つ。二人は、ふられる、ふられない以前の問題だったことに、真子の告白で気づく。

「と、いうことは……」

「等しくチャンスがある……ちゅーことか……？」

草と茶々は互いの考えを確かめあうように、顔を見あわせた。真子は「ふん」とそっぽを向いている。茶々と草は、いつものように真子に飛びついて、それぞれが肩に腕をまわした。

「草、まだまだ勝負はこれからやな」

「負けない」

茶々が草に、にやつと笑って言った。草も口元だけに笑みを浮かべて言う。

「あつ、草が笑ったのはじめてみた」

驚いたように真子が言った。そんな真子に誇らしげに、茶々が言う。

「オレは、草ちゃんの笑顔みたことあるけどなあ」

「キモイ……」

草の一言に、わざとらしく泣き顔を作ると「オレ、傷ついたあ」

と茶々が言う。

「そんなん言うてると、本気になったオレに負けんで」

真子はそんな二人に言う。

「何も、草と茶々に惚れるとは限んないよね」

真子の言葉に、二人は顔を見合わせる。言われてみれば、その可能性だつて充分ふくんでいる。しかし、二人は問答無用という感じに声を合わせて言った。

「他は認めない！」

「他は認めん！」

二人の剣幕と息のあいように、真子は、けらけら。笑った。真子の笑い声につられて、草も茶々も笑う。

「アカン、草めっちゃ怖い。グエ」

「……………」

「そんなことないじゃんねえ。草？」

変な呪いにかかる前と変わらない3人。でも、確実に変わり始めている。それでも、今は前以上に気分がよかった。もっと、親友になつたみたいだ。

高台から町を見下ろすと、それぞれの家が、それぞれの灯りを灯している。空には、どつぷりと星が出てきて、まあ、それなりにいい光景じゃないのかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1855e/>

みっくす

2010年10月8日15時28分発行